

アンドレ・ジッドとポール・フォール（2）

吉井，亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/16861>

出版情報：Stella. 28, pp.163-178, 2009-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



アンドレ・ジッドとポール・フォール（2）

吉 井 亮 雄

前回（本誌『ステラ』第27号）に続き、現存の確認されたジッド＝フォール往復書簡を年代順に通覧しよう。ただし今回紹介する残りの書簡は、総数は10通にも満たず、またそのほとんどが第一次大戦勃発までの数年間に集中している。ジッド書簡の遺失分を考慮に入れたとしても、両者の交流が『詩と散文』の終刊を境に急速に希薄化することを示す顕著な偏差といえよう。

1911年にふたりが交わした書簡としては、前回提示の「フォール祝宴」開催をめぐる2通しか残っていないが、宴の半月後（2月24日）、詩人の甥で『詩と散文』の手伝いをしていたロベール・フォールがジッドに宛てた書簡がパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫に保管されている。その主要部分――

親愛なる先生

わざわざテキストの転写をお取り計らいくださり、厚くお礼申し上げます。まことに有り難うございました。

校正刷は、まず間違いなくノルマンディー〔キュヴェルヴィル〕からのご帰着に先立ち、お手元に届くはずです。現在までのところ、この「旅日記」は、アルチュール・ランボーのきわめて重要な未刊書簡、シュアレスやローラン・タイヤード、ヴァン・レルベルグの作品とともに掲載される予定です。当誌はエミール・ヴェラーレンとアンリ・ド・レニエにも原稿を依頼中ですが、おふたりの了解も問題なくいただけるものと存じます。またポール・フォール、エドモン・ピロン、ジョルジュ・デュアメル の作品も掲載されます。〔…〕¹⁾

『詩と散文』第24号（1911年1-3月号）の編集が話題である。同誌は上述の祝宴の折にでもジッドに寄稿を要請したのだろう。それにたいし作家が委ねたのは、14年前に出版していた『旅日記、1895-96年』の冒頭部分（全体の約3分の1）であり、新規に執筆したものではなかった。ちなみに「テキストの転写」とは、おそらく組版の便を考慮してのタイプ稿作成のことを指す。いっ

ほう列挙された他の作品のうち、ランボーの未刊書簡、シュアレスの恋愛詩篇、ピロンのペロー『コント』新版への序文、フォールの散文詩集『永遠のアヴァンチュール』抜粋は予定どおり掲載されるものの、それ以外はいずれも間に合わなかったようで、次号以降に繰り下げとなった²⁾。これに代わって結果的には、ユーグ・ルベルやスチュアート・メリル、アン・リネール（本名アンリ・ネール）、オスカル・ミロシュ、タンクレッド・ド・ヴィザンらのテキストが誌面を飾っている。また同号の末尾には小型活字で組まれた「フォール祝宴」の詳細な報告が添えられたが、参会者の名簿、欠席者からの詫び状・祝い状、フォールを含めた16名のスピーチなどは、当時のパリ文壇の一側面を伝える貴重な記録である³⁾。

＊

翌1912年は、『詩と散文』を中心的な話題としてジッドとフォールとの交流がそれなりの実質をともなった最後の年。ジッドからの書簡は一通しか残っていないが、ドゥーセ文庫所蔵のフォール書簡数通によって両者のやりとりはおおむね窺い知ることができる⁴⁾。

最初に紹介する2月15日のフォール書簡はジッドへの返信だが、その文面からは後者が次のような内容を書き送っていたことが分かる。すなわち、アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーンの翻訳にかんする仲介、ライナー・マリア・リルケのための『詩と散文』定期購読の手続き代行、そしてフォールにたいする『新フランス評論』への寄稿の打診と、ジッド自身の『詩と散文』への協力の申し出である。フォールの返信を訳出しよう――

〔パリ、1912年2月15日〕木曜

親愛なる友

お便りには嬉しい知らせばかり。もっとも、あなたがくださるお手紙の場合はいつもそうではありませんが。

お話は承りましたので、デュ・パスキエ夫人によろしくお伝えください。『詩と散文』は〔スウィンバーンの〕『カリドンのアタランタ』を、29号で一時に、あるいは29-30号の2回に分けて掲載いたしましょう。しかしながら私としてはできるだけ早く訳稿をいただきたい。というのも、次の28号（1月-3月）から掲載が可能ならば、是非ともそうしたいと思うからです。実際にどうなるかは分かりませんが。

新規購読者？ すばらしい！ しかもそれが、見事に翻訳されたテキストを私が賛嘆しながら読んだライナー・マリア・リルケ氏とあっては。結構、結構、まことに結構。できるだけ多くの購読者を私どもにお送りください。当誌は、散文の扉、詩の扉をとどもに大きく開いております。

ご芳信のなかでとりわけ有り難いのは、完璧なる貴誌『新フランス評論』の栄えある作家連のひとりに私を加えてやろうというそのお気持ちです。私がこの友愛の徴にいか感激しているか、あなたのご想像もつかないでしょう。ここ2週間以内に、拙著『永遠のアヴァンチュール』第3巻冒頭のリートを15ほどお送りします。

しかし、お手紙のなかで何にもまして喜ばしいのは〔…〕、近々『詩と散文』（当誌の多くはあなたがお創りになったものです。然り、我々がいかにあなたに負っているかはよくご存じのところ）へのご寄稿をお願いできそうだという点です。この期待に乗じてお願い申し上げます。次の28号のために何ページか（できるだけ沢山）いただけないでしょうか。あなたに相応しい然るべき場所に掲載させていただきます。3週間以内に玉稿を頂戴できるならば幸甚に存じます。〔…〕迅速なるご返信をたまわります。偉大にして親愛なるアンドレ・ジッド様。敬具。

ポール・フォール

記述内容にかんする若干の補説——。スウィンバーンの戯曲『カリドンのアタランタ』は、実際には第30号から4号連続で『詩と散文』に掲載される。翻訳を担当したエレーヌ・デュ・パスキエは、チェスタートンの他にもタゴール『果実あつめ』やジョイス『ダブリン市民』などのフランス語訳で知られ、なかでも『果実あつめ』は今なお定訳として広く流布している⁵⁾。リルケ（当時はパリ在住）の『詩と散文』購読については、彼自身の2月22日付ジッド宛書簡に、仲介の労にたいする謝意とともに「2日前に定期購読者としての最初の号を受け取った」⁶⁾とある（「木曜」とだけ日付を記された上掲書簡を同月15日のものと特定できるのはこの事実による）。またフォールが賛嘆しつつ読んだ「見事に翻訳された」リルケ作品とは、前年ジッドがフランス語に訳し『新フランス評論』に発表していた『マルテの手記』断章のこと⁷⁾。いっぽうフォール自身の『永遠のアヴァンチュール』は、量的には書簡で予告された15篇前後から増え、結局は計27篇のリートが『新フランス評論』の5月1日号に発表される。フォールと同誌との関係についてミシェル・デコーダンは、この詩人を当時の「新世代グループのなかで『新フランス評論』に寄稿しなかったごく少数者のうちのひとり」⁸⁾と規定しているが、厳密にいうならば、この指摘は正しくないことになる。

フォール書簡にたいするジッドの返信も日付は「木曜」としか記されていない。「迅速なる返信を」という文通者からの要請と、同日内の往復信が珍しくなかった当時のパリの郵便事情から見て、まず間違いなく同じ2月15日の手紙である。その全文――

〔パリ、1912年2月15日〕木曜

親愛なる友

あなたのすばらしいお手紙に感激しながら、また当惑もしております。というのも今のところ私には完成したものは何もないからです。しかし結局のところ『詩と散文』に委ねるのが『放蕩息子』や『バテシバ』のような「完結作品」である必要もなかろうかと存じます。仮に「完結作品」ということになれば、現在とりかかっているのは息の長い作品であり、あなたをひどくお待たせすることにもなりかねません。また、当面求められるテキストを仕上げるためにその仕事を離れば、気が緩んでしまいそうで、そのことも懸念されます。

話を詰めておきましょう。『詩と散文』用には2つの断章が考えられるのですが、それは決してそこそこの出来のものではありません。私の考えるところ、それ自体はすでに完成している、つまり、あなたの友人が到達する最高度の仕上がりを見せているのです。だが如何せん、軽く見られても仕方ない断章ではあります。この2つのうち、どちらを取るか。ユリシーズとミネルヴァが対話する『アヤックス』の一場（散文）か。『プロセルピナ』の一場（50行ほどの一連の^{アレクサンドラン}12音節詩句）か……。私としては断然後者を選びます。なぜなら…… いや、それについては、すべて直接お会いしたうえでお話できないでしょうか。『新フランス評論』にと、ありがたいご提案をいただいているリートについても然り。日時と場所を一言お知らせいただければ（お望みとあらば、来週の月曜にでも早速）参上いたします。敬具。

アンドレ・ジッド

前段で言及される『放蕩息子の帰宅』と『バテシバ』は、それぞれ全文が『詩と散文』の第9号（1907年3-5月）、第16号（1908年12月-09年3月）に掲載された作品だが⁹⁾、いずれも当該号の巻頭を飾っており、そのことにも主宰者フォールがジッドにたいし払っていた格別の配慮が見てとれる。また「現在とりかかっている息の長い作品」とは、いうまでもなく『法王庁の抜け穴』（1914年刊）のこと。いっぽう後段で話題となる『詩と散文』次号への寄稿にかんしては、著者自身が推すように、ギリシア・ローマ神話に想をえた戯曲『プロセルピナ』の断章が採られる。もうひとつの戯曲『アヤックス』は、その後も書き継がれることはなく、10年近くをへて文芸誌『レ・ゼクリ・ヌーヴォー』に短い断章が掲載された（ともに本年3月刊行のプレイアッド新版『小説・物

語、詩作品と劇作品』に収録されている)。

この手紙にたいするフォールの返信は3週間後の3月9日まで遅れた。書簡の過半はその事情の説明に割かれている。これを要すれば、フォールはパリを離れ、ラ・フェルテ＝ミロンなど4カ所を次々と移動していた。ようやく転送が追いついたジッドの手紙を読んだフォールは、親しい詩人アレクサンドル・メルスローを介して、パリ帰着後の面会を急ぎ申し入れたが、今度はジッドのほうが行旅に出てしまっていたのである(同月2日、南仏経由でフィレンツェに向け出立、パリ帰着は4月末。ただし後述のように、フォールは相手の旅行がこれほど長期のものとは承知していない)。こういった経緯を綴った長い前置きにつづいて、書簡の本題が次のように記される――

いま私はただ茫然としながらも、お手紙を手にして嬉しく、さらにあなたが〔寄稿を〕約束して下さったことに欣喜雀躍しております。

お約束に意を強くして、玉稿をソフィー＝ジェルマン通り6番地の拙宅宛にお送りくださるようお願いする次第です。頂戴する『プロセルピナ』の一場は、申しあげるまでもなく当誌の最も大振りな活字で印刷いたします。玉稿を、そしてあなたのお返事を一刻も早く読ませてください。校正刷はほとんど直ぐにもお送りします。

お手紙にあったように拙稿『永遠のアヴァンチュール』第3巻の冒頭をお送りすべきかどうか、お知らせいただけますか。短いリート17篇ですが、多すぎないでしょうか。どれかを仰っていただければ、その箇所を削ります。敬具。

ポール・フォール

追伸。ゲオンは私にとっても親切にしてくれました。彼はベルギーで大成功を収めているようです。

本題については説明の必要はあるまい。追伸第2文を補足すれば、フォールが述べているのはアンリ・ゲオンの戯曲『パン』のベルギー公演のこと。この作品は前年11月にパリの芸術座で初演され好評を博し、その勢いをかって彼の地での公演が実現していたのである(印刷テキストはそれと同時期の1912年3月、設立後まだ1年も経たぬ新フランス評論出版から刊出した)。

上記書簡がジッドの滞在していたイタリアまで転送されたか否かは定かでないが、少なくとも『プロセルピナ』の原稿が3月半ば頃『誌と散文』に届けられたことは疑えない。同月21日付のジッド宛フォール書簡には、早くも組み上がった『プロセルピナ』の校正刷が同封されているからである(前便にたいし

てジッドからの返信はなかったものの、この時点でフォールが相手のパリ不在を想定していないことは文面から明らかである）——

親しき友

さっそく校正刷を同封いたしましたので、どうか見事な玉稿『プロセルピナ』を掲載させてくださるようお願い申し上げます。実は大変遺憾ながら、あなたからお便りがなかったので(私の呪わしい旅行がその原因だったのですが)、返事をくれたグリファンのほうに打診してしまったのです。そうです、未刊の詩を送ることを条件に、あなたもご存じの巻頭のページを。ですが、同封の目次をよくご覧いただき、『プロセルピナ』が栄えある場所に配されることをどうかお認めください(『詩と散文』創刊以来、巻頭には常に散文を配するのが倣いとなっていますし、また、このたびの〔巻頭の〕散文はやや番外のもの、『詩と散文』としては初めての時事ものと言ってもよいでしょう)。

そうです、できるならば校正刷がお手元に届いたその日のうちに一組に修正を施し、当方にお戻しくださるよう是非にもお願い申し上げます。[…]

あなたは私の7年の活動、『詩と散文』に捧げた7年を大いに助けてくださった。それにたいする感謝の念はすでにたびたび申し上げてきましたが、あなたへの感謝はいや増すばかりです。

ここで少々自惚れを申しあげるべきでしょうか。私がフランス語による傑作選を提供するという当誌の方針に沿って奮闘努力していることはご承知のところ。すでに多くの人々を当代の誉れとなるような作品へと誘い導いてきました。あなたの完璧な『新フランス評論』とまではいきませんが、『詩と散文』も我らが「大義」のためには無益ではありませんでしたし、それは今も変わりありません。しかし、物質面という意味ですが、〔当誌は〕私がひとりで支えています。精神面で私をご援助ください。今がその時なのです、改めてお願い申し上げます。

ご受領次第(本当に当てにしております)修正済みの校正刷をお戻しいただければ幸甚に存じます。敬具。

ポール・フォール

拙稿はジャック・リヴィエール氏にお送りしました。氏のほうからお手紙をいただいております。その件についても重ねてお礼申し上げます。

外国への長旅の際によく採られた手段だが、おそらくジッドは原稿の送付や校正の作業を予め『新フランス評論』の仲間(シュランベルジェか?)に委ねていたものと思われる。いっぽうフォールが恐縮しつつ報告するように、『プロセルピナ』はヴィエレ＝グリファンの詩「ミノス」と同様、まもなく刊出する『誌と散文』の巻頭には置かれず、「やや番外の散文」、ルイ・マンダンの評論

「ド・レニエ，ド・マン両氏と現代詩」が2作品の露払い役を務めることになる。なお追伸に名の挙がるジャック・リヴィエールは，前年12月からピエール・ド・ラニュクスに代わり『新フランス評論』の編集次長の立場にあった（雑誌表紙裏に名が記載されるのは1912年1月号から）。ジャック・コポーの指揮の下^{もと}，精力的に編集の実務を担っていたのである。

＊

第1次大戦は芸術文化活動にも大きな打撃を与えた。戦時体制下の数年間、文芸紙・誌はいずれも活動の停止・縮小を余儀なくされる。創刊以来順調に部数を伸ばしていた『新フランス評論』でさえ、開戦にともない1914年8月号をもって休刊を決定せざるをえない（ただし単行書の出版はそれまでと変わらないペースで継続される）。当時の文芸誌の常とはいえ、財政的に厳しい状況が続いていた『詩と散文』は、すでに同年1-3月の第36号で発行が止まっていたが、結局はこれが終刊号となってしまうのである。11月9日付のジッド宛フォール書簡はそういった事情を切々と綴っている――

親しき友

我々の雑誌はもう発行されることはありません。新聞各紙はきわめて厳しい戦時予算のため、詩人に居場所はなく、私は自費で印刷して窮境をしのがざるをえません。

熱情を込め、あらゆる信念を傾注して、この恐ろしくも崇高なる戦いについて「懲らしめの歌」を書いています。

この歌を新聞に載せさせるのはひどく難しいことでした。文学的すぎる、そう言うのです。文体に少しばかり配慮はしますが、それだけです。おそらく〔テオドール〕ポトレヤ〔ポール〕デルレードのようなトーンならば好いのですが、私にはそういう才覚はありません。一紙だけ、大きな日刊紙が歌のひとつをお情けで採ってくれましたが、条件は稿料なしというものでした。〔…〕新聞は諦めます。新聞では、そのつど詩人の誇りが傷つきます。詩は当今まったく無益なものとして扱われてしまうのです。それもまたひとつの見解なのでしょうが、詩こそを唯一の美德、この世の哀れな旅路での唯一の糧とする者にとっては、なんと醜い見解であることか。

ああ、自分の力は分かっています、意余って力足らずということは分かりすぎるほどです。しかし私は、2つの大きく明確な理由のために沈黙を破らざるをえないのです。ひとつは、この恐ろしい叙事について大いに語るべきものを心中に感じているということ。またひとつは、家族を食ばさせねばならないということです。

このように述べたうえでフォールは、困難な状況を凌ぐ当面の策として、次のような出版計画をジッドに報告する――

そういう訳で、私は一年間、半月ごとに『フランスの詩』というタイトルで、一種の「新聞」、戦時叙情誌を出します。恐ろしい悪夢の速やかな終結（ただし我々が決定的勝利を取めた後での終結）を望みながらも、一年間にわたって出し続けます。[…]

この「会報」の第1号を差し上げます。友情の徴として、『フランスの詩』の全号を定期的にお送りします。しかし親しいアンドレ・ジッド、思い切って申しあげると、定期購読者を何人か見つけていただけるならば、どれほど有り難いことか！

この試みに失敗すれば（そうならぬことを期待しますが）、支援を得られないとなれば、私は何をすればよいのか。私が兵士として期待されることはありません。いっぽう私には英雄的・愛国的で、励ましとなる詩想、時に残酷でさえある詩想が山のようにあります。[…] 本当に私には語るべき題材がいくつもあるのです。

この第1分冊の4つの歌をお読みいただき、長年にわたるあなたの激励を私がさほど裏切ってはいないことをお確かめください。というのも、決して忘れることはありませんが、あなたは初期習作時代の詩人ポール・フォールを激励してくださった数少ない人々のひとりだからです。これらの詩にはフランスの「音調」を意図しましたが、目的は達せられているでしょうか。

第1号は12月1日付となっていますが、もう直ぐ発行されます。別便で何部かお送りますので、周りの方々にお配りいただければ幸いです。

『フランスの詩』の1年間、つまり24号分の購読料は5フランです。しかしそれはあなたには当てはまりません。私という吟唱詩人のために――別の言い方をお望みならば、我らがフランスの、そして我らが同盟国、とりわけ聖なるベルギーの英雄的行為を歌うことを使命と心得るトルヴェールのために――あなたが獲得してくださるであろう方々にのみ適用される価値です。

ああ、親愛なるジッド、このような手紙を書くのはなんと難しいことでしょう。

要すれば、私は自分の運命の一部をあなたの両の手に委ねるということなのです。[…] 敬具。

ポール・フォール

アラン＝フルニエの死を知り、悲嘆にくれています。いかに多くの同胞が殺されたことか！…… 卑劣なドイツ人たちめ、卑劣なドイツ人たちめ！ そして私の親友オリヴィエ・ウルカードも…… 彼のことをご存じだったでしょうか。ジャムが彼のことをとても愛していました。

書簡後半の主題をなす『フランスの詩』は、時局を題材とするフォールの詩を2段組で収めた4折1葉、横長8ページ立てのまさに個人雑誌。書簡にあるように、分売はされず年間購読者のみを対象とした。当初予定された第24号

(1915年11月15日)では終わらず翌年度へと継続されたが、発行はじきに間遠・不定期となり、1917年元日の第30号で終刊を迎えた。掲載詩篇のうち初年度分の詩篇の大半を収録した『フランスの詩——戦時叙情詩(1914-1915年)』が『フランスのバラード』第19巻として1916年、パイヨ社から上梓されている。追伸の内容について補説すれば、詩人オリヴィエ・ウルカード、次いでアラン＝フルニエの戦死(ともに1914年9月)の報に接したフォールは、『フランスの詩』の第2号・第6号にそれぞれの追悼文を載せることになる。そのうちウルカードを偲んだ一文は、ここにも名の挙がる共通の友人フランシス・ジャムへの献辞を掲げる。

ジッドは1914年10月から翌々年春にかけて、ベルギーからの避難民救済の活動に文字どおり挺身した。またこれに続いては、マルク・アレグレ青年との恋愛、それに起因する夫婦関係の悪化という人生の重大事を経験する(そこから生まれたのが『田園交響楽』であることは言わずもがな)。いっぽうフォールは、何冊か詩集を上梓はするものの、作品発表の場は平時とは比ぶべくもないほどに制限されていた。ジッドとの交流もその機会を失い、上記書簡の頃から大戦終結後まで4年間にわたりほぼ完全に途絶えてしまう。長い沈黙がようやく破られたのは1919年初頭のことであった。1月8日のジッド宛書簡——

親しき友

かくも長いあいだ無沙汰を重ねたのち、あなたに2度つづけてお目にかかれ何と嬉しかったことか!

覚えておいででしょう、〔ドイツ軍が各所でフランス領内に侵入した〕1914年8月2日まで、あなたは私に実に有り難い評価と共感をお示くださった。だからこそ1919年を迎えた今、私は躊躇うことなくご高配をお願いする次第です。

事情は以下のとおりです。

私は数日前から、ある新雑誌、『ル・モンド・ヌーヴォー』という大きな国際誌の文学部門の編集を引き受けています。エミール・ブートルーやキプリング、メーテルランク、アンリ・ド・レニエが参加して名誉委員会の一員となり寄稿してくれます。

お名前を名誉委員会に加えさせていただき、また創刊号(2月1日から10日までの間に刊行予定)にご寄稿をお願いしたいのです。メーテルランク、キプリング、レニエ、そしてベルグソンも寄稿予定です。[…]

何ページか未発表のものを戴けないでしょうか。5か6、7ページ程度、それよりも多くても少なくとも結構です。ご寄稿いただければ何よりも存じます。長短にかかわらず玉稿は当誌にとって大きな喜びとなりますでしょう。

言うまでもなく、我らがうちにあっては「純粋な文学」だけが重要です。戦争に想を得た得ないは問題ではありません。

お受けいただけるならば、『ル・モンド・ヌーヴォー』を代表して、今月末日にページ当たり 20 フランを謹んでお送りします。[……] 駅に入ってくるドイツ軍の急行列車のように私は急いでいます。できれば 2 月 1 日に発行したいのです。玉稿は即刻、一週間後——あるいは可能なかぎり早急に——お願い申し上げます。

粗末な封筒に用箋を詰め込みすぎないように、「本誌のプログラム」は別便でお送りします。仏英米の雑誌です。さらにはオランダも加わります。すべての費用を負担する創刊者兼編集長は、すばらしい男で私の友人ですが（またキプリングの友人でもあります）、オランダ人なのです。

マルセル・ドルーアンによりしくお伝えください。彼も当誌に関心を持ってくださるといのですが。私も彼に便りをします。敬具。

ポール・フォール

国際的な月刊誌『ル・モンド・ヌーヴォー』の発刊にかんする話題である。同誌は事務局をパリに置き、「フランスおよび同盟国・中立国間の社会・経済・文学・芸術面での交流推進」を目標に掲げて、この年の 3 月 20 日に創刊号を発行する。書簡が言及するように、ロンドン在住のオランダ人エベッド・ファン・デル・フルーフが資金提供者として全体の指揮を執ったが、編集の実際は、フランスはフォールが文学、シャルル・ダニエルが政治を担当し、またイギリスおよびアメリカにかんしては『タイムズ』紙主筆ヘンリー・ウェッカム・ステードと著名な特派員ハーバート・アダムス・ギボンズがそれぞれ自国関連を担当した（掲載テキストはフランス語訳）。このように当初の編集陣は主要 3 国で構成されたが、第 3 号からはポーランド・ベルギー、オリエント・極東の 2 部門が加えられた。ただしフォールがフランスの文学関連をとり仕切ったのはわずか半年間にすぎず、第 7 号からは編集から外れている（もっとも彼は第 8 号に寄稿しているので、直ちに同誌への関与を止めたわけではあるまい）。書簡の記述に話を戻せば、名誉委員会に加わり創刊号に寄稿して欲しいというフォールの要請にたいし、少なくとも表紙や目次を捲るかぎりでは、ジッドが応じた形跡はどこにも見あたらない。彼としては何よりも『新フランス評論』の復刊こそが急務だったためか。ちなみに最初期の執筆陣のうちフランス語圏からの寄稿者としては、フォール本人や、彼が名を引くメーテルランク、アンリ・ド・レニエのほか、ポール・マルグリット、ラシルド、ポール・アダン、エドモン・ピロン、アンリ・バシュラン、エルネスト・レイノー、カミーユ・

モークレー、ジョルジュ・デュアメル、モーリス・ボーブール、アレクサンドル・メルスローらが代表的な顔ぶれであった。その後、『ル・モンド・ヌーヴォー』は1933年まで発行を続け、兩次大戦間の厳しい国際情勢の下、欧米をはじめとする各国間の文化交流に少なからず貢献することになる。

これ以降の現存が確認された書簡はただ一通、1934年7月のジッド書簡だけである¹⁰⁾。ある自筆稿専門業者の販売目録に載った短い抜粋によれば、チェコ・ボヘミア西部の温泉地カルロヴィ・ヴァリ（ドイツ名カールスバート）に逗留中だったジッドは、旧友来訪の知らせに、「治療で少々^{せわ}忙しくしてはいるが、時間を作って親愛なる詩人と握手を交わしたい」と喜びを伝えている。とはいえ、実際に面会が成ったのか否かをはじめ、その時のことはまったく分かっていない。仮に両者が相見えていたとしても、もはや間歇的な出会いのひとつにすぎなかったと思われる。

第1次大戦の終結後、1919年6月に復刊された『新フランス評論』は大方の熱い支持をえて急速に部数を伸ばしてゆく。またその単行書出版部門は翌7月、株式会社「ガリマール書店」へと移行し、やがて同社は「王朝」とも称される大出版社へと成長・発展を遂げる。それらの表舞台には立たなくとも、誰もが幕の後ろに控えるジッドの存在を意識し、この「最重要の同時代人」¹¹⁾の一挙手一投足に注目した。まさに彼は時代の公準だったのである。いっぽうフォールも地道に詩作に励み、生涯をかけた連作『フランスのバラード』を定期的に上梓はした。だがその実直な創作活動も、大きく変貌する戦後の文学のなかではいささか影が薄い。また1928年にはヴァレリーとの共同編集で、装いも新たに『詩と散文』を復刊するが、この試みもわずか2号を出しただけであっけなく頓挫してしまう。委細は不明だが¹²⁾、少なくともそこには恒常的な財政難に苦しみながらも旧シリーズを主宰していた頃の粘り強さは見いだせまい。第2次大戦後もジョルジュ・ブラッサンスの曲と歌唱にのせた素朴な言^{パロール}の葉は巷の人々に愛されたが、荒々しい時代の変化とは距離をおいた詩人フォールはその時すでに幾分かは過去存在となっていたのである。

＊

本稿では『詩と散文』、初期『新フランス評論』両誌の関係について具体的な

分析を加える予定であった。前号掲載分においてもその旨を述べていたが、この問題については他日を期すこととしたい。ジャン・ロワイエール主宰の『ラ・ファランジュ』、アドリアン・ミトゥアール主宰の『ロクシダン』など、いくつかの同時代文芸誌との交流をはじめ、考証にはまだまだ詰めるべき点が多いと認識するにいたったためである。現時点では以下を指摘するにとどめよう。

ヴェラーレンやヴィエレ＝グリファン、ジャム、あるいはアンナ・ド・ノアイユではなく、彼らほど世評が高かったとは言えぬフォールが「詩王」に選出されたのは、象徴主義から出発し、それを継承しながらも、やがてナチュリスムをつうじて「生」へと向かい、『詩と散文』では新旧世代の糾合を目指したその幅広い経歴を買われてのことであり、微妙な文壇力学が影響した、いわば現代詩の共通項抽出の結果でもあった。だが初期『新フランス評論』の主要メンバーは、詩想の自発性を優先する立場から彼を擁護したアンリ・ゲオンをのぞけば¹³⁾、いずれもフォールの詩が易きに流れ、芸術創造に必要な「制約」を軽視しすぎであると見なした。同誌が『永遠のアヴァンチュール』抜粋の掲載後、続けて彼に寄稿を求めることがなかったのはこれがためである。

『新フランス評論』が復刊後急速な成長を遂げたのになんてい、『詩と散文』は復活・再生の道をたどれなかった。もちろん多くの文芸誌が同じように戦争を機に消滅したのだから、同誌がことさらに劣っていたと速断することはできない（それどころか同誌は当時の最も重要な文芸誌のひとつであった）。むしろ明暗を分けた要因として『新フランス評論』ならではの活力に注目すべきであろう。じっさい『詩と散文』にかぎらず、たとえば上述の『ラ・ファランジュ』『ロクシダン』などをこの雑誌の傍らに置いてみると、それらには存続のための新陳代謝が十分ではなかったことがよく分かる。とりわけ初めての現代戦の予感に脅かされ、またこれを現実として体験した世代の新たな世界観（それはもはや世紀末象徴主義の世界観とは対蹠的でした）にこたえる文学を創り出せなかったことが大きい。逆に『新フランス評論』の場合は、第一の顕著な相違として、マルタン・デュ・ガールやサンレジェ・レジェ（後のサン＝ジョン・ペルス）、ヴァレリー・ラルボー、早世はしたもののジャック・リヴィエールをはじめ、ジッドら創刊者たちよりも年少の新人作家を途切れることなく発掘・育成しているのである。第二の違いは、外国文学の積極的な受容・紹介であった。むしろ『詩と散文』など他雑誌もそれなりに外国作品を翻訳掲載して

はいたが、『新フランス評論』は、ラルボーの選択眼に導かれたイギリス文学の紹介などに見られるように、その基本方針たる党派性排除の一環として外国文学の動向に極力敏感であろうと務めたのである。ただし同誌は、先行する『メルキュール・ド・フランス』のような外国文学のいわば総花的・百科事典的な俯瞰の提供をめざしていたわけではなく¹⁴⁾、中心メンバーや定期的寄稿者が個人的にいただく親近感や好奇心、あるいは多分に偶然に依存する人的接触をつうじて、そのつど臨機応変に外国文学を摂取していったこと、またそれによって同誌の言説が逆に硬直化をまぬかれ、ある種の柔軟さを保ちえたことも同時に指摘しておくべきであろう。

以上、粗略な論述ではあったが、現存するジッド＝フォール往復書簡の通読にもとづき第1次大戦前後の文学環境の一面を瞥見した。今後も調査・探索を継続し情報の遺漏を埋めて、できるだけ早い時期に精度の高いフランス語版往復書簡集を作成・公表する所存である。

註

- 1) ロベール・フォールの1911年2月24日付ジッド宛未刊書簡(BLJDγ519-31)。
- 2) デュアメル の劇作「明かり」が翌25号(以後3回連載)、ヴァン・レルベルグの未刊書簡が第26号、ヴェラーレンの詩篇が第27号、タイヤードの散文が1年後の第28号にそれぞれ掲載される。
- 3) Voir *Vers et Prose*, t. XXIV, janvier-février-mars 1911, pp. 113-139.
- 4) なお、以下の論述で引用・言及する両者の書簡のレフェランスについては、前回と同様、稿末に「往復書簡一覧」を掲げるので、これを参照されたい。
- 5) エレーヌ・デュ・パスキエがジッドに宛てた書簡はこれまでに9通の存在が確認されており、そのうち1912年1月18日付の書簡が本件にかかわるものと推測されるが、残念ながら筆者は未見。
- 6) Lettre de Rilke à Gide, du 22 février 1912, reproduite in André GIDE - Félix BERTAUX, *Correspondance (1911-1948)*, éd. Claude FOUCART, Lyon: Centre d'Études Gidiennes, 1995, p. 79.
- 7) Voir Rainer Maria RILKE, *Les Cahiers de Malte Laurids Brigge* (Fragments) [trad. André GIDE], NRF, n° 31, juillet 1911, pp. 39-61.
- 8) Michel DÉCAUDIN, *La Crise des valeurs symboliste. Vingt ans de poésie française, 1895-1914*, Toulouse: Privat, 1960, p. 344. ちなみに後年の関与ではあるが、

フォールはさらに1930年代から40年代にかけて計4回『新フランス評論』に寄稿している。

- 9) なお両作品とも後にアドリアン・ミトゥアールの「ロクシダン文庫」から単行出版されている(『放蕩息子』は1909年[ただし実際の刊出は翌年1月],『バテシバ』は1912年)。
- 10) さらにもう一通、フォールに面会を乞う、日付のないジッドの短信が残っているが、筆跡から判断するに、かなり早い時期に書かれたものである。
- 11) 『レ・ヌーヴェル・リテレル』誌1924年10月25日号に掲載されたアンドレ・ルーヴェールの論文「Le contemporain capital: André Gide」による表現。なお、この論文タイトルはルーヴェールの著書『世捨て人と悪党』(*Le Reclus et le Retors. Gourmont et Gide*, Paris: G. Crès & Cie, 1927, pp. 121-140)に収録のさい「詐欺師アンドレ・ジッド André Gide imposteur」に変更された。
- 12) 同誌発刊の経緯については筆者もそれなりに調べてみたが、まったくと言ってよいほど関連資料が出てこない。じじつ、最近出版されたミシェル・ジャルティによる浩瀚なヴァレリー伝(Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris: Fayard, 2008)も、この件については一言も触れていない。
- 13) Voir Auguste ANGLES, *André Gide et le premier groupe de «La Nouvelle Revue Française»*. II. *L'âge critique (1911-1912)*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque des Idées», 1986, pp. 414-415.
- 14) アルフレッド・ヴァレット編集の隔週誌『メルキユール・ド・フランス』には、ドイツ、イギリス、イタリア、スペイン、ポルトガル、アメリカ合衆国、スペイン系中南米、ブラジル、ギリシア、ルーマニア、ロシア、ポーランド、オランダ、スカンジナビア、ハンガリー、チェコなど、各国の文学の動向を伝える短信欄が常設されていた。同誌と外国文学の関係については次の論文を参照—— Robert JOUANNY, «Les Orientations étrangères au *Mercur de France*», *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, janvier-février 1992, pp. 56-72.

ジッド＝フォール往復書簡一覧(書き手・日付/発信地/レフェランス)

- | | | |
|-------------------|----------|---|
| 1. G = 03.02.1893 | Paris | BAAG n° 29, p. 55. |
| 2. F = 31.10.1896 | Paris | BLJD γ 519-2. |
| 3. G = 00.06.1898 | Paris | BAAG n° 106, p. 360 / n° 110-111, p. 288. |
| 4. F = 06.09.1898 | Marlotte | BLJD γ 519-1. |
| 5. F = 15.04.1900 | S.l. | BLJD γ 519-3. |
| 6. F = 16.08.1900 | Paris | BLJD γ 519-4. |
| 7. G = 12.12.1900 | Biskra | Quatorze lettres (deux fois sept). |
| 8. F = 10.09.1903 | Ault | BLJD γ 519-5. |
| 9. F = 15.01.1905 | Paris | BLJD γ 519-7. |

- | | | | |
|-----|-----------------|----------|---|
| 10. | F = 24.01.1905 | Paris | BLJD γ 519-8. |
| 11. | G = 09.02.1905 | S. l. | BLJD γ 749-1. |
| 12. | F = 09.02.1905 | S. l. | BLJD γ 519-19. |
| 13. | F = 05.06.1905 | Paris | BLJD γ 519-9. |
| 14. | F = 19.06.1905 | Paris | BLJD γ 519-10. |
| 15. | F = 27.08.1905 | Ault | BLJD γ 519-6. |
| 16. | F = 24.11.1905 | Paris | BLJD γ 519-11. |
| 17. | F = 30.11.1905 | Paris | BLJD γ 519-12. |
| 18. | F = 02.12.1905 | S. l. | Cat. vente Bibl. Gide, n° 169. |
| 19. | F = 11.12.1905 | Paris | BLJD γ 519-14. |
| 20. | F = 00.02?.1906 | S. l. | BLJD γ 519-15. |
| 21. | F = 22.02.1906 | Paris | BLJD γ 519-16. |
| 22. | F = 06.12.1906 | Paris | BLJD γ 519-13. |
| 23. | G = 08.12.1906 | Paris | BAAG n° 69, p. 97 ; YOS, p. 18. |
| 24. | F = 12.03.1907 | Paris | BLJD γ 519-17 ; YOS, p. 163. |
| 25. | G = 14.03.1907 | Paris | YOS, p. 164. |
| 26. | G = 00.03.1907 | Paris | Stella n° 18, p. 250. |
| 27. | G = 00.05.1907 | Paris | YOS, p. 168. |
| 28. | F = 00.05.1907 | Paris | BLJD γ 519-26. |
| 29. | G = 17.06.1908 | Paris | CG. |
| 30. | F = 00.01.1909 | Paris | BLJD γ 519-20. |
| 31. | F = 18.01.1909 | S. l. | BLJD γ 519-18. |
| 32. | G = 27.01.1911 | Paris | Cat. vente Naville, n° 225 ; BAAG 37, pp. 88-89 ;
BLJD γ 519-29 (brouillon). |
| 33. | F = 28.01.1911 | Paris | BLJD γ 519-28. |
| 34. | F = 15.02.1912 | Paris | BLJD γ 519-23. |
| 35. | G = 15.02.1912 | Paris | BAAG n° 68, p. 89 ; CG. |
| 36. | F = 09.03.1912 | Paris | BLJD γ 519-21. |
| 37. | F = 21.03.1912 | Paris | BLJD γ 519-22 ; Koffeman, p. 74. |
| 38. | F = 19.11.1914 | Paris | BLJD γ 519-24. |
| 39. | F = 08.01.1919 | Paris | BLJD γ 519-25. |
| 40. | G = 21.07.1934 | Karlsbad | BAAG n° 61, p. 136. |
| 41. | G = SD. | Paris | CG ; BAAG n° 15, p. 28. |

Références abrégées :

BAAG : *Bulletin des Amis d'André Gide*, revue trimestrielle publiée par l'Association des Amis d'André Gide depuis 1968.

BLJD : Bibliothèque littéraire Jacques-Doucet, Paris.

- Cat. vente Bibl. Gide : *Catalogue de livres et manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*, Paris : Édouard Champion, 1925.
- Cat. vente Naville : *Œuvres d'André Gide provenant de la bibliothèque de M. Arnold Naville*, catalogue de la vente aux enchères du 7 novembre 1949, Genève, Salle Kundig.
- CG : Dossiers de la Correspondance générale d'André Gide, Centre d'Études Gidiennes, Tupin-&-Semons.
- Koffeman : Maaïke KOFFEMAN, *Entre classicisme et modernité : «La Nouvelle Revue Française» dans le champ littéraire de la Belle époque*, Amsterdam-New York : Rodopi, 2003.
- Quatorze lettres (deux fois sept) : *Quatorze lettres (deux fois sept)*, s. l. n. d. [Aux dépens d'un amateur pour l'enchantement de ses amis, 1935].
- YOS : André GIDE, *Le Retour de l'Enfant prodigue*. Éd. critique établie et présentée par Akio YOSHII, Fukuoka : Presses Universitaires du Kyushu, 1992.